



## 工藤篤子メールマガジン36号 2003.09.26

☆9月15日（月）ホロコースト生存者の集い ★燃える歌

今回のメルマガは、前回書ききれなかった「ホロコースト生存者の集い」でのレポートです。必死でまとめたつもりですが、それでもかなり長くなってしまいました。でも、是非皆さんにお分かちささせていただきたいことです。どうぞお時間のあるときに、少しずつお読みいただければと思います。

---

### ☆9月15日（月）ホロコースト生存者の集い

先週、エベネゼルは12人のホロコースト生存者をイスラエルから招きました。そして、15日、コントアハウスにあるエベネゼル事務局で、生存者の皆さんと和気あいあいとした昼食会がもたれました。

#### （ペレツ氏の話）

その間、私の向かいに座ったペレツ氏は、4年間の収容所生活を語ってくれました。淡々とした口調で語られた内容は、聞く者にとって衝撃的なことばかりでした。

ペレツ氏はポーランドのクラカウに住んでいましたが、1941年にアウシュビッツの収容所に入れられました。彼は第五棟のベルトコンベア部に所属されたため、他の労働者たちよりはるかに軽い仕事ですみました。とはいっても一日の労働時間は11～12時間、一週間では80時間の重労働となりました。他の棟で重労働をさせられた者は、あっという間にどんどん死んでゆきました。彼は、その死体と、ガス室で虐殺された者の死体を処理する仕事もさせられました。それは、毎日何千キログラムにも及ぶ骨と皮だった、と言います。

また、ペレツ氏はお父さんのことを、目を潤ませて語りました。1945年5月、収容所から解放されると、ドイツのシュトゥットガルトへ行きました。お父さんがそのあたりにまだ生きているという知らせを聞いたからです。そしてハイデルベルクの病院に入院しているお父さんを、シュトゥットガルトから何日も歩いてやっとの思いで探し当てました。しかし、お父さんには彼が自分の息子だと認識することができませんでした。それは、お父さんの意識が病で朦朧としていたのと、お父さんと離れていた4年間に、ペレツ氏は14歳の少年から18歳の青年に成長していたためです。その数週間後、お父さんは息を引き取りました。

### （その他の生存者の話）

昼食の後、ホロコースト生存者のスピーチの時になりました。

しかし半数の方は、自分には語るができないと言って、向けられたマイクに「ノー」と手を振りました。その表情から、60年近くたった今も残された傷の深さを思わされました。

「・・・収容所の体験は絶対口にしたくありませんでした。子供たちには自分たちの苦渋の記憶を負わせたくなかったし、自分自身、過去には一切触れたくなかったからです。しかし孫に聞かれました。もし過去の記憶に触れれば気が狂うのではないかと恐れましたが、思い切って話してゆくうちに、過去の恐怖から解放されてゆくのが分かりました。・・・」

「・・・アウシュビッツ収容所で、8人姉妹のうち7人が死んでゆきました。私だけが生き残りました。私にとっては、収容所の苦しみより、家族を失ったことの方が地獄でした。でも私は、いつかこの収容所から解放される時が来る、いつか自分たちの祖国イスラエルに帰ることができるという一筋の希望の糸にすぎたのです・・・」

「・・・イスラエルでの新しい生活が始まったとき、自分は過去の記憶を一切消し去りたいと、何度思ったことでしょうか。別の人間になりたいと切望しました。でも、それは不可能なことでした。そして今こうやって生きているのは、神の力以外の何ものでもありません。・・・」

「・・・自分はドイツに二度と足を踏み入れるまいと思っていました。今回の招待を受けようかどうか、ほんとうに悩みました。でも、皆さんの大きな愛に触れて、私たちは大きな慰めを受けました。来てよかった。ありがとう！・・・」

### （シャローム・アレヘム）

これまで、たくさんのホロコースト映画を見たり、本を読んだりしてきましたが、実際、これだけたくさんの生存者にお会いして話しを聞くのは今回が初めてでした。皆さんの苦しみは、10分～15分くらいではとうてい言い尽くせるものではありません。けれども、語る皆さんの背後から、神の民全体のうめき声が聞こえてくるようで、私は聞きながら深い慟哭を覚えました。

その時、エルケから、私に一曲賛美するよという合図があったのです。それで、シャバット（安息日）でよく歌われる歌「シャローム・アレヘム」（あなたがたの上に平安がありますように）を賛美しました。歌いながら、私たちクリスチャンが、長い歴史の間、キリストの御名によって神の民を迫害してきた罪を思うと、ひとりひとりに「ごめんなさい」という謝罪の思いでいっぱいになり、賛美というよりは、祈りになりました。

「ありがとう!」、とユダヤ人の女性が私を抱きしめました。思いが伝わった、と思いました。同時に、この瞬間、福音歌手としての私の使命のひとつは、神の民を慰めることにあると思わされたのです。

「慰めよ。慰めよ。わたしの民を。」とあなたがたの神は仰せられる。(イザヤ 40:1)

### (私感)

和解は、赦しを求めることから始ります。

私たちクリスチャンは、キリストが私たちの罪の身代わりになり、尊い血を流し、神と和解させてくださったにもかかわらず、ユダヤ人をキリストの名のもとに迫害し、多くの罪なき人々の血を流してきました。

歴史上代表的なのは、11～13世紀の十字軍による迫害、15世紀のスペインでのレコンキスタ(国土再復興)、ポグロム(ロシアにおける1871年、1903年の二度にわたるユダヤ人虐殺)、そして20世紀のホロコースト等です。それ故、ユダヤ人がキリストという名前を聞くと身の毛がよだつのです。そのユダヤ人たちに、最初からキリストを宣べ伝えるのは困難なことです。私たちが、最初にするべきことは、私たちが犯してきた罪を心から謝罪し、そして謝罪の気持ちを行動として表明してゆくことだと思います。そのとき、彼らの多くはイエス・キリストの愛に気づいてゆくに違いありません。

私のユダヤ人のための祈りは、ミニストリーズ設立と共に、聖書のヘブル的視点に立つ理解から始まりました。ユダヤ人たちは、神が愛された選びの民です。私はその民に養子として入れていただいたのです。ユダヤ人は神の家の長子、私の兄弟です。私はこの兄弟たちを心から愛しています。そして、この民こそ、神の真の救いに入れられるために、私たちが愛という負債をお返ししなければならない第一の対象であると思います。(どうぞローマ 11:11~36 をお読みください)。

---

### ★燃える歌

1995年、ハンブルクの音楽学者であるペーター・ペーターゼン教授らによって、「燃える歌ー焼ける音楽」(ハンブルクの音楽学生のために)と称して、ナチファシズムの音楽についての文献が発表されました。そこには、収容所のユダヤ人たちが歌わなければならなかった歌に、いつも以下のことばが挿入されていました。

“vergangen(消滅した)”

“zum Tod gebrannt(焼かれながら死に向かって)”、

“ueber blutgetraenktem Boden(血を吸い込んだ大地の上で)”

これらの歌は、「Zuendende Lieder 燃える歌」とか「Verbrannte Musik 焼ける音楽」等と呼ばれました。そして毎日のように号令される「Todesmarch 死の行進」では、ナチス兵の前で、彼らは列を組んで、「わたし達は一緒に生きるか死ぬかをつかみとる」「暗い夜空に炎が輝く、炎は心を二つに裂く、炎よ心を熱く燃やせ・・・」と歌って行進させられたのです。これを、何とユダヤ人たちは、衰弱しきった体から出せる限りの声を張り上げて歌わなければならなかったのです。生存者の一人の方も、自分たちが「燃える歌」を大きな声で歌って将校を喜ばせた時には、小

さなパンが一個もらえた、と言っていました。そして、今でも、あの時の歌は、彼らの記憶から消されることは決してないと言います。

## ★ヒットラーの軍歌

ヒットラーのスリー・ワーズをご存じでしょうか。

1. Kampf カンプッフ（戦い） 2. Sieg スィーク（勝利） 3 Heil ハアイル（安全、幸福、宗教的には「救い」という意味、万歳、「ハイル・ヒットラー」は「ヒットラー、万歳」という意味）です。

ヒットラーはこの三つの言葉を掲げ、国民に、戦い、勝利を得て、安全で幸福な国家を作り上げよう、と呼びかけました。そして自分はそのための総指揮官であると宣誓したのです。ですから、ヒットラーの軍歌には、この三つの言葉が必ずといっていいほど挿入されました。この時代に、音楽教育を受けた者は、作曲家であれば、ヒットラーの意向に合わせて作曲し、歌手や演奏者は、国や戦争や独裁者を称えるために歌い、演奏しなければなりませんでした。そうして、ヒットラーは、音楽の持つ大きな力を利用し、国民の意識を自分に同調させていったのです。

音楽には力があります。ソロモンが多くのお讃者を用い、神を讃えたときに、神殿に神の御霊と栄光が満ち溢れました。しかし、唯一賞賛されるべき神以外のものを賞賛するときには、その悪しきものは高められ、悪の霊も満ち溢れます。音楽にたずさわる者は、特にこのことを心しておかなければならないと思います。

---

## ●お祈りください

[9月27日](#)、ローテンブルク・ビュメ市のバプテスト教会主催、シャガール展記念賛美コンサートのために。会場では、シャガールの旧約聖書を題材にした絵画が展示されます。ちなみにシャガールはユダヤ人でした。ローテンブルク市長ら、たくさんのローテンブルク市民が出席します。良き伝道のチャンスとなりますように。また私が、ドイツ語でしっかりした証しができますようお祈りください。

[10月11日](#)、ハンブルク、ブランケネーゼ教会での“Come To Me”コンサートのために(16時開演) 主催：ハンブルク日本人教会

[10月15日](#)からはいよいよ日本です。

主の祝福と平安が皆様と共にありますように

シャローム